

存する「自由至上主義的多元社会」の構図が生じる(ヘーゲル)。その中では異なる道德観を持つ倫理的異人たちが同意によって協働するが、内容のある道德を客観的真理として獲得することはできない。のみならず、当初は同意が倫理的異人たちの協働を可能にする単なる手続きだけであつたとしても、やがて同意を与える自律と自由のみが価値とされることで、人間の自然のあり方を克服して、自己(欲望を含め)を実現することが正しいとされるに至る(自由な多元社会)。

この状況に対してエンゲルハートが試みるのは、生きること超越的、人格的な意義があることを「選択」することに基づく倫理(生命倫理)の構築である。伝統的キリスト教は超越的にして人格的な神と合一するという純粹体験を志向し、神により与えられた「聖霊」により人間の心は神を知覚することはできると考えた。原罪によって世界は破滅的なものになっており、人間のあり方(自然)が全て正しいものではないが、良心(聖霊)により神と神の法則を志向することができ、それが人間の本来の「自然」である。そのように知覚された神の法則から道德性は獲得できるのであり、それは価値を自己ではなく他者(神と他の人格)に置いて応答を求めていくことであり、そのためには禁欲と悔い改めの生活と、典礼に基づく共同体が必要である。言い換えれば、エンゲルハートは人間の良心を神の与えたものとするので、道德感情はそのままで規範性を有するとしたのである。

エンゲルハートが構想した伝統的キリスト教生命倫理は、人間が生きることの意義は相互に応答する存在という意味での

「人格」にあり、そのような存在意義を選択することで、神との合一を志向する人間のあり方が設定され、そこから良心(道德感情)を神が与えたものとして肯定するという論理であると言える。それは近代がキリスト教から剥ぎ取ってしまったものに注目して再構成した倫理であるが、最初の段階に「選択」が設定されていることが示すように、「選択」を共有しない者にとつては説得性を持たない、信仰共同体の内部に閉じられた倫理である。それも一つの方法ではあるが、より開かれた宗教的生命倫理を追究する余地は、まだ残っていると思われる。エンゲルハートが拒絶した、相対化し弱められた宗教性(「スピリチュアリティ」)を積極的に活用することは、考えるに値する選択肢であるように思われる。

仏教の生命観と代理母

金 永晃

仏教の生命観は「阿頼耶識」における輪廻の途上で胎児が生まれる過程を説明してくれる。この胎児説とは、衆生が業力(karma)によって、三界六道を輪廻するという輪廻説によるものであるが、前生から現世において胎児が生まれる過程を説明するものである。胎児の出生説について『増一阿含経』によれば、生の中間原理である中有は唯識学の阿頼耶識の生命観に影響を与える。唯識学では、中有の概念を識の転換として阿頼耶識を立てる。一切衆生は、死後前世の業が阿頼耶識に貯蔵さ

れて次の生命に絶え間なく続く。すべての生命は仮想的に構成する一切種子識である。阿頼耶識は無限なる過去により永却の未来に向けてつながる根源的生の流れとして生死を繰り返す。仏教的通念においては生が結成される条件として「三事合説」を立てる。(1)両親の和合、(2)母親の適切は条件、(3)それから中有の下降。

ここで中有は前世と後生の媒介となる。この中有の概念に包括されて阿頼耶識として転換される。

代理母とは、子宮がないなど、また、何らかの理由で子供を産めない夫婦に、血のつながりのある子供を授けることを目的とする行為のことである。当初、代理母の概念において、「サロゲート・マザー (surrogate mother)」と呼ばれていた。

実例として、長野県諏訪マタニティークリニック(二〇〇九年十二月二日、読売新聞朝刊)では、夫の精子を妻以外の女性の子宮に注入し人工授精させて、その女性に妊娠・出産の過程を引き受けてもらい、出産後に新生児を夫婦が受け取るようになるが、子供は夫婦二人の遺伝子ではなく、夫の遺伝子とサロゲート・マザーの遺伝子を引き継ぐことになる。

もう一つは、「ホスト・マザー」によるものである。妊娠中の事故で子宮と胎児を失った姉に、実の妹が代理母の役割を自発的に申し出たことである。姉夫婦の卵子と「精子を体外受精」させて、受精卵を妹に戻し、出産に至った。九ヶ月間、自らの胎内で育てた子供であっても、生まれてきた子供の遺伝子は姉夫婦から受け継いだものである。

その後、技術の進歩により、体外受精による妊娠・出産が可

能になってきた。何らかの理由で子宮に問題があったり、子宮を摘出しているために自分が妊娠できない場合、ホスト・マザーによる出産が行われる。夫婦の卵子と精子を体外受精させてできた受精卵(正確には胚)をホスト・マザーの子宮に戻して妊娠の状態をつくる。この方法では、生まれてきた子供は、代理母を依頼した「夫婦双方」からの遺伝子を受け継ぐことになる。

仏教では、生の始まりの条件は、父母の交わりから出発する。性交は受精のためであり、生の誕生のための必要条件である(有性生殖)。次に、女性の適切な可任期(排卵)である。排卵は現代医学の時期より少し早い。また、中陰身の現存と下降という条件である。以上が生有縁起の必要条件(三事合合)であった。

生有縁起は業の複製における現世に限らず前世の自己行為に対する倫理的責任となる。一方、体外受精、体細胞による人間複製は、三事合合の要件から考えると父母の精血の条件が欠如した無生生殖に当たる。仏教の三事合合の要件から見ると生の始まり要件が満たされていない生有縁起の形態となる。

さらに無性生殖として人間複製は、将来人間のアイデンティティについての深刻な問題、すなわち、「遺伝的アイデンティティの問題」、「心理的アイデンティティの問題」、「社会的アイデンティティの問題」が根本的に崩壊してしまう恐れがある。